

## &lt;YUIMA NAKAZATO&gt;

田島征三

YUIMA NAKAZATOは、繪魯洲さんの一人息子、唯馬くんのことである。

YUIMA NAKAZATOがオートクチュールによるパリコレに選ばれたのは、2016年だった。当時、森英恵以来の快挙と騒がれたが、今やそんな次元はとっくに乗り越えて、YUIMA NAKAZATOは世界に羽ばたいている。

東京ミッドガーデンの中にある21\_21 DESIGN SIGHT に、YUIMA NAKAZATO EXHIBITION 「HARMONIZE」を、今年2月25日見に行った。ここでの前回の展示は、ぼくの流木オブジェや絵本の原画だったので、唯馬くんと同じスペースにぼくも展示したことがあるというのが、なんとも誇らしくエラクナッタように思えてうれしかった。が、それよりも誇らしく思ったのは、彼の「民主化されたオートクチュール」作品のパーツに道路標識に使用されたフラグや蛍光性の着衣などをリサイクルして、他の一般的な素材と結合させていたことだ。それも凡庸なりサイクルではなく、パラグライダー やパラシュートの廃物を利用しているが、円形の空気吸入口が、オートクチュールのおしゃれな紋様のポイントになっていたりしていることだ。

「さすが我が廃棄物処分場建設反対運動の同志繪魯洲さんのあとづぎ息子！」とファッション界の最先端の若者たちで超満員の会場でオタケビ声を上げそうになった。同時にその時ぼくの目の前にはトラスト地のまわりの殺伐とした赤土の荒野が現れた。そして重機の間を走り回り、建設工事に抗議するぼくら命知らずの同士繪魯洲と征三、二人ともガードマンにつかまって顔面血だらけにされた思い出がよみがえる。



「東京都三多摩地域一般廃棄物巨大処分場建設反対運動」ぼくらの闘いは敗北したのだろうか？いや決してそうではない。今も闘いは続いており、脈々と受け継がれているのだ。YUIMA NAKAZATOの「民主化されたオートクチュール」の優れた美しいデザインは、日の出第二処分場建設現場で流された繪魯洲の血が蕩々と流れているのだ。